

## 第4回高等学校改革プラン推進委員会（第一推進委員会）議事録

- 1 日時 平成17年7月25日（月）午後1時30分～午後4時30分
- 2 場所 長野県庁西庁舎 401会議室
- 3 出席委員

中村 正行委員長	市川浩一郎委員
森野 貞雄副委員長	若麻績享則委員
中沢 一委員	坂口 昌夫委員
小山 元彦委員	小山 壽一委員
塚田 芳樹委員	宮本 精一委員
牧 重信委員	丸山 稔委員

### 4 開会

（三澤教育支援主事）

時間より若干早いですが、お集まりのようですので、始めさせていただきたいと思います。本日はお忙しい中、お集まりいただき誠にありがとうございます。

それでは、委員長さん、よろしくお願いいたします。

（中村委員長）

皆さま、ご苦労さまです。

ただいまから、第4回高等学校改革プラン推進委員会を開催させていただきます。前回第3回あたりから、魅力づくりということでご議論をいただいてきております。

今日は、まず初めに前回要求のありました資料、それからまた事務局のほうで用意いただきました資料について説明をいただきます。その後、まず資料に関する質疑応答の時間を取りたいと思います。

本日は、議論の中身も前回の内容の引き続きということで、私のほうで少し整理してきました。まだ議事録のほうができあがっていませんので、私のメモからですが、あらかじめ何項目が挙げさせていただいて、それについてもう一度論点を幾つかに絞りながら議論していきたいと思います。

それでは、まず前回同様、資料の説明を事務局からお願いしたいと思います。

### 5 資料説明

高校教育課三澤教育支援主事から説明（説明内容省略）

### 6 議事

（中村委員長）

ありがとうございました。

それでは資料についての質疑応答をいただきたいと思います。最後にあった参考資料の意見書、要望書、思うこと、願うこと、これらの資料は委員長あてに来たものも皆さんに

ぜひご確認していただきたく、お渡ししてございます。そこも含めて、ご質問等ありましたら、お願いいたします。

前回、中学生の意見があればということで資料1、資料2を準備していただきましたが、これは昨年、一昨年の実施のもので検討委員会に提示されているものですので、例えば新しくこのようなアンケート取られるという予定はございませんか。

（三澤教育支援主事）

今のところ、ございません。

（丸山委員）

資料1の中学3年生のアンケートの3ページですが、「どのような高校があって欲しいですか」というのがありますが、これは実際のアンケートも、ここにある文章で出たのか。というのは、単位制、普通高校とか総合学科高校とか多部制・単位制とかというのは、一応分かっているのかということがあるのです。この説明にはここにあるものの説明の中で選んでいるのかなということが、ちょっと疑問なのです。

（三澤教育支援主事）

ご用意した資料の枚数の関係で、質問用紙まで掲載してございませんが、解説を付けた形でアンケートを採っております。

（中村委員長）

総合学科高校とはこういうもので、多部制・単位制とはこういうもので、という解説を添付してアンケートを実施したのですね。

（三澤教育支援主事）

はい。

（中村委員長）

丸山委員、よろしいですか。

ほかに、どんなことでも構いません。

よろしいでしょうか。

（丸山委員）

質問というか、議論というふうに感じると思うのですが、このアンケートをどのように読むかという問題があると思うのですが、例えば資料2は細かく見ていませんが、この分析、考察等もありますが、全体としてかなり普通科志向が強いですね。そういう傾向が、ものすごく強く見られます。その辺については、どのように分析されているのか。ただ、全体として普通科志向が強いことがうかがえると書いてありますが、その背景とか、その辺はかなり重要だと思います。

それからもうひとつ、職業科で「どういう学科がいいですか」というのがありましたね。

資料3を見ていただくと、これも県民意識についても確かに全体的に今ある学科についてありますが、これもどのように見るかによるのです。

私は、普通科と農・工・商というふうな伝統的な職業科と、やはりそのところはかなり多くなっているところで、非常に重要だと思います。そういう点も含めて、生徒や県民の意識、新しい学科とか、新しいコースということが今、はやっていますが、この辺のことをきちんと、何で普通科志向が多いのか、それから伝統的な普通科、職業科というところが多いのかという部分について、我々はどのように考えたらいいかというのは、かなり重要な部分だと思います。これらについて事務局は、どのような分析をしているのか、あるいはここでもぜひその辺を議論してほしいと思います。

(中村委員長)

事務局、コメントがありましたらお願いいたします。

(篠原教育幹)

お願いいたします。

若干、ワーキンググループ、つまり局内の検討委員会が立ち上がった段階のアンケートでございまして、少し古いものになっていて申し訳ございません。

ひとつは普通科志向というふうに、断定してしまっているかどうかということがあると思います。と言いますのは、やはり資料2の場合は、中学2年生の段階というのがございまして、中を詳しく見ていっても分かりますが、なかなか具体的に「こういうところへ進学したい」というふうなものが、はっきりとは細かいところまで学習した上でのアンケートというふうになっていないということは言えると思います。中学3年生になると、もう少し具体的などころ、これが出てくるというふうに思っています。

それから資料3でございしますが、かなり無作為で一般の県民の皆さんからアンケートをいただいたわけですが、この辺もまだ現在のように、例えば総合学科であるとか、あるいは多部制・単位制というものがクローズアップされる前の状況の中で採ったアンケートであるということも、若干考察の中へは加味していただければならないというふうに思っております。またさらに、これらの細かいところについて、もう少し検討を加えることが必要であるということは思っております。

(中村委員長)

ありがとうございました。

関連すること、あるいは別のことで何か資料についてのご質問等ありましたらお願いします。

(中沢委員)

資料の6でございしますが、その第1通学区の中学校別進学先の関係で、坂城、戸倉上山田中学の進路状況を見ると、第1通学区の旧4区に比較的集中していますが、第2通学区へも相当行っているなということは、他の通学区にないひとつのこんな事情がここにあるのかなと推察するのですが、その辺をもう少し具体的説明をお願いしたいと思います。

（三澤教育支援主事）

坂城と戸倉上山田中学についてですが、高校進学された生徒さんが、坂城中 172 名、戸倉上山田中 255 名いる中で、第 1 通学区第 4 区の公立全日制高校に坂城中が 75 名、戸倉上山田中が 137 名進学しているということでもあります。それと同時に第 3 通学区の公立全日制高校へ進学した生徒が 12 名、27 名、それと第 2 通学区第 5 区へも 42 名、56 名というように、生徒さんがある程度広範に進学している状況でございます。これは地理的な条件といたしまして、この地域からは比較的通学圏域が 3 区から 5 区までにまたがるように広く、進学の際に区を越えて学校の選択が可能であると見られるのではないかと思います。

（中沢委員）

要は、上田から千曲、要するに屋代の近辺というのは、通学区そのものが入り乱れているというか、両方行くことが可能な地域ですので、その通学区は一体的なもので、第 1 とか第 2 とか一般的に通学区を分けることのできない通学区域と位置付けてもいいかどうかということです。

（柳澤教育主幹）

現在本県は、大きな 4 つの通学区になっており、隣接は自由に往来が可能になっておりますが、今、お話がありましたように坂城、戸倉上山田中学のところは両方の通学区に自由に行けるといふ、地理的な条件というものが一番大きく作用しているのだらうと思います。

そういう中で生徒さんたちが、どういう学校を選んでいくかという選択の幅がそれぞれの通学区の学校、両方の通学区の学校を選ぶことが可能であるということだらうと思っています。

（中沢委員）

坂城地域は、第 1 通学区の中だけでもものを考えることは難しい地域だということを、確認しておきたかったのです。

（中村委員長）

はい、よろしいですか。

それでは、小山委員、お願いいたします。

（小山（元）委員）

資料 8 についてお尋ねします。

公立高等学校中途退学者の状況について、資料を出していただきましたが、これは全県下の数字でございますね。第 1 から第 4 の各ブロック、県下大体偏りなく、およそ平均的に考えていってもいいと対処してよろしいかと。

(柳澤教育主幹)

申し訳ございませんが、手元に正確な数値を持っているわけではございませんけれども、恐らくこの全県下、大体この率でいっているのだろうと思います。

先ほども説明の中にありましたが、ご覧いただきまして分かりますとおり、中退者が大変減っておりますが、当然生徒数が減ってまいりますから数も減るだろうということでありまして、ご覧いただいて分かりますように、いわゆる中退率も減ってきているということでもありますので、中退をしている生徒さんが年々減少しているという傾向にあるということだと思います。

(中村委員長)

ほかに資料の内容について、ご質問等ありますでしょうか。

なければ、また議論の中で出てきましたら、ご質問をお願いしたいと思います。

それでは、本日の議題のほうに入っていきたいと思います。本日も、資料説明から入りましたが、ほぼ改革プランの最終報告に関連することに関しては、皆さんにご理解いただいて、特に総合学科高校や多部制・単位制については詳しい説明をしていただきましたので、理解いただいたというふうに考えたいと思います。もちろん途中で、また新たな疑問等が出ましたら、そのときに質問等をお願いします。

これまでの中でも幾つか論点が出てきております。まだ議事録がまとまっていないようですので、私のメモだけなのですが幾つかまとめてみました。本来なら文章としてお出ししたかったのですが、時間がなくて申し訳ありません。後で口頭で申し上げます。特に前回はこの推進委員会の進め方について、幾つかご意見をいただきました。どのように進めていくのか、先がよく分からないというようなご質問もありました。私がお答えしたのは、まず初めには総合学科高校、多部制・単位制というものの説明を聞いた上で、我々の推進委員会に求められている4つの項目について議論をしていく。まずは魅力づくりということから入っていきたい。

大体の回数とかその辺は、私、委員長の考えとしては年末までに11回、12回開催させていただいて、時間を掛けたいと考えています。目標を定めないでやりますと、やはり集中したことができませんので、そのように考えています。もちろん議論の途中で、委員さん方のご意見があれば、回数を増やすなり、あるいは時期を許される範囲内で延ばすということも考えておりますが、ひとまず目標としては年内12月を目標に議論を進めていきたいと考えております。

また議論の進め方についてはご意見をいただきたいと思います。まずは今日の議題ということで、魅力づくりを本格的に進めてまいりたいと思います。もちろん前回、その前もその件に関してはご意見をいただいておりますが、第3回の推進委員会で出ましたことをこの場で申し上げて、またその中で幾つかここでご議論いただきたいと思います。

第3回で出た意見としましては、まず1つ目は経済的な面です。幾つかの高校が統廃合されるけれども、その代わりに総合学科高校、多部制・単位制のほうにお金を掛けるといふ点も、やはり教育の中身とともに考えていかなければいけないのではないかという、経済的な面が指摘されてきたのだと思います。

それから中高一貫校のことをどうしたらいいか。これは魅力づくりの中で考えていく、

その議論が必要であるというふうなご意見が出されたという部分もあります。

それと報道等で盛んに言われております、白紙撤回、県議会の決議もありましたが、そういったことも考えながら慎重に進める必要がある。これに対しては、事務局のほうでは、求められれば地域に説明に行く。慎重に審議をしていく。推進委員会にもお願いしたいということです、この辺も頭におきながら、考えていかなければいけないと思います。

それから、私のほうから中学生の意見を聞いてみたいということでしたが、なかなかアンケートを取る計画はないということです、皆さん方の地域の学校で、中学生の意見とかありましたら、この委員会に反映していただきたいと思います。高校生の意見は結構聞こえてくるので、中学生の意見等は「不安だ」というのは聞こえてきますが、具体的に新しく学校ができたときに、それがうれしいことなのか、その辺も特に知りたいという思いがあります。

それと議論の進め方ということで、当面年内にというご説明が事務局のほうからあったと思いますが、これは若干翌年の初めまで入ってもいいということですが、最終的には年度内に実施計画をまとめていかなければならないという事務局のお立場ですので、この辺に関しても議論の対象としていいと思うのですが、そう言ってもこの前の段階、検討委員会の段階を考えますと15年より検討して、今年度17年に推進委員会での検討、この後さらに整理をして実施するまでには、まだ何年かかかるということです、それほどゆっくり、慎重には違いありませんが、議論を先へ先へと延ばしていくわけにはいかないと思いますので、その辺も改革プランに関して意見を言いながら、それがうまくまとまっていけば、やはり推進委員会の議論は年内までということで、お願いしたいと思っています。

前回特に魅力づくりに関してご意見が出たと思うのですが、多部制・単位制のことで、少人数で学べるよさというところですね。それから交通の便、できれば近くにあればよいということもあるが、そうでもない。仕事を持って通っているような生徒さんは、特にオートバイや自動車も使えるということで、それほど交通の便にこだわる必要もない場合もある。もうひとつ、大きくしてしまわないで、幾つか分散してあったほうが、より魅力があるのではないかというようなご意見もありました。この辺も、もう少し深く議論をする必要があるのではないかと思います。全日制に併設して、少し分散したほうがいいのではないかというようなご意見もありました。

また、推進委員会の進め方についてご意見をいただきました。まだ抜けているかと思いますが、その辺をご指摘いただきながら議論を進めたいと思います。

今、挙げたような項目のほかには何かございますか。

これは資料の説明という中で出す、何度かご議論いただいているので、本格的に議論を進めたというところまではやっていませんので、ある項目に絞って時間を掛けて、幾つか取り上げながら進めていきたいと考えますので、あらかじめ幾つか挙げておいていただいて、関連項目についてご議論いただきたいと思いますというふうに思います。

(中沢委員)

いいですか。

高校改革プランというものも、89校すべてにかかわる問題で、こういう基盤がなければおかしいと思います。今の議論の中では、県からの提案として出された、学校そのものに

ついて焦点が集まってしまい、例えば本当に5学級なり6学級が、平均的なものであるとするならば、あるいは8学級、9学級を持っている、そういったところの学校の対応は基本的にどう考えているのだろうか。

例えば上田市の中では、ほとんどが8学級、9学級であり、理想的なものは6学級というなら、それなりにそういったところも、削減してそれによって学級編成がどうなるかと、いった考え方が、まだはっきりさせていただいていないと思っています。

それと今、「年内に」というお話もございますが、現在17年時点でございますが、その後29年ぐらいまでは、ある程度生徒は横並びで、その後30年、31年になると「ガクン」と落ちるということの数であるとするならば、もっといろいろと段階的に検討していく必要があるのではと思っています。

その辺の問題も、大事な問題のひとつになりはしないかなと思っています。これは議論の中で検討する問題だと思います。

(中村委員長)

ありがとうございました。

都市部にある、やはり大きな学級数の定員に関しても議論をしてほしいとのご指摘がありました。それもほかの推進委員会では、ご意見があったようにうかがっていますが、それも取り上げていきたいと思います。

また、もっと段階的にというご意見ですが、段階的にというのは、今の示されている高校改革プラン最終報告を、段階を分けて進めていくということだと思います。それを実施するに当たっては一度ではなくて、議論を進めながら分けて進めていくということでしょうか。

(丸山委員)

今、委員長さんにまとめていただいた今までの論点の中で、私はそういう意見ですが、ひとつ大きなもので、私も資料を出させてもらいましたが、総合学科について現時点でどういうふうに評価するか。よく総合学科のメリット、デメリットみたいなものとか、その辺で総合学科に職業科を切り替えるということも含めて、本当に総合学科がいいのかどうかという問題も含めて、議論も出ていると思うし、私のほうも資料を出しましたので、それもぜひ魅力づくりの中で議論をしてほしいなと思います。

(中村委員長)

そうですね。

デメリットに関しては、他県の状況はご説明いただいて、それは当然見習わなくてもいいわけですが、その辺も議論をしていきたいと思っています。丸山委員には、そちらの面の資料を出していただいたので、それを活用していきたいと思っています。

今、魅力づくりとともに今まで出てきた議論の項目を挙げさせていただきました。もちろん相互の関連をしていますので、自由に議論の中で相互の出していただきたいのですが、あまり全体にわたって、ご意見を伺いますといっても、いまさら審議が進みませんので、項目を絞ってやっていきたいと思うのです。

前回からの引き続きというふうに考えますと、総合学科高校の丸山委員のご意見、その辺の議論、それから多部制・単位制の配置に関する議論が少し進んでまいりましたので、その辺を今日は集中的にやりたいと思いますが、いかがでしょうか。

その後、第5回、第6回は議論の進み方に応じて、ほかの問題点を確認しながら整理したいというふうに考えています。

(宮本委員)

お願いします。

前回事務局のほうから、これまでの他推進委員会の様子や様々な説明がありましたが、報道等を見ますと事務局のほうで、長野南高校へ出掛けて説明したとか、その辺の経過とか内容についてと、あるいは他の推進委員会では高校で実施して見学をしたというようなこともあったらしいですが、その辺の議論の状況等について、説明を、その前にいただきたいと思います。

(中村委員長)

私も、それは必要だと思いました。他の推進委員会の動向に関しては報道等で説明がありますが、もう少し詳しく事務局から説明いただきたいと思います。

また特に、この第一推進委員会にかかわることで、教育委員会さんが出掛けていって説明された、そのときの状況等も重要であると考えますので、ご説明をお願いしたいと思います。もしよろしければ今、この場で説明していただけますか。

(篠原教育幹)

それでは、まず南信地区第三推進委員会ですが、第三推進委員会で学校を視察するというのを前回の推進委員会において行ったわけなのですが、これは私どもの資料で、机上でいろいろな理解をしていただいたわけなのですが、やはり学校の雰囲気といいますか、高等学校の様子というものが、委員の皆さんはもう少し身近に実感したいという声が第三推進委員会の中に挙がりまして、委員長さんの提案の中で皆さんがそれに同意されて実施したということでございます。

具体的には、第三推進委員会では、普通高校の進学校、それから地域高校ではございませんが、都市部を少し外れた所にある中規模の普通高校、そして職業高校と、3校視察をいたしました。その中で特に校長先生から学校の方針、それから現在取り組んでいること、これは質疑応答という形の中で知っていただいたわけですが、具体的に授業も見学し、こういった様子の授業を行い、そしてどのような雰囲気の中で生徒たちが授業を受けていたか。もちろん少人数で行う授業もございましたし、それから実験実習、これを実際に授業として行っている、そういう場面も見学していただいたということでございます。

全体として、まだそれを行った総括等はまとめてあるというわけではありませんが、ある意味実感、体感して学校という雰囲気というものは、委員の皆さんにお分かりいただけたのかなと思います。ただし、いかにせん限られた時間の中である程度離れた高等学校を視察いたしましたので、すべてこの学校がこうだというふうなところまでの理解というものはどうだったかと、個人的にはそんなことも思っております。



それから、もう1件ですが、私どもは基本的にはいろいろな地域で、説明をお願いしたいという求めがあれば、出掛けていってご説明申し上げるというふうなことを行っているわけですが、実際、長野南高校の場合は、これは私どもに来た連絡は、生徒が高校改革プランについて生徒間での討論会を行うということでした。それで、生徒たちがどんな意見を言うのだろうか、私たちはそういうスタンスで、ある意味では逆に楽しみもあって行ったわけです。しかし実際に始まりましたら、40分間の討論でしたが、生徒間の「私はこんなふう思う」「いや、しかし自分は、みんなが出している案には賛成である」「反対である」とかということではなくて、基本的にはさまざまな生徒が、高校生が高校生として持つ質問、疑問、こういったことを私どもにするという形で40分間過ぎたわけです。

たくさんの、高校生らしいいろいろな声が出されました。そういったものについて、個別にひとつひとつ細かく答える時間ありませんでしたので、いろいろな声を私どもに投げかけられたものをまとめまして、最後に課長のほうで生徒諸君に説明をしたということでもあります。

非常に単刀直入な、例えば「なぜ長野南が、候補案の中に入っているのか」といったようなものから、「最後に統合された場合にクラブ活動はどうなるのか」というような、高校生の生活にとって身近な疑問から、大きな疑問までさまざまあるというような状況でございました。以上であります。

(中村委員長)

ありがとうございました。

説明に行かれたのは長野南高だけですね。第一推進委員会の範囲ではそこだけですね。

(篠原教育幹)

具体的に説明というか、今のところ長野南高校は説明というよりはむしろ、どういう意見が出るかというのを楽しみにしながら行ったということがありますが、実際に説明、あるいは質疑ということを前提としてということで、同じように坂城高校、こちらのほうにもまいりました。

坂城高校は、ここに委員としていらっしゃいます中沢委員さんに、場を設定していただきまして、坂城町の関係者の皆さん、それから同窓会の皆さん、坂城高校の関係者の皆さん、こういったところでお集まりいただいて、その中でさまざまな質疑応答をしたということでございます。

(森野副委員長)

今のことについて先日の新聞報道でもさまざまな意見が県教委に対して出されたという報道がされていまして。また本日配布いただいた意見書にもありますが、その中で長野南高が好きで入ったのだと、こういうことを言っていますね。それで現在、魅力ある学校づくりに一生懸命で学校の在り方を主張していきたいと言っているわけです。まさにここに書かれている青天の霹靂であると、寝耳に水だということで、高校生だって非常に不安がっていると思います。

それに2枚目の下の、丸よりちょっと下なのですが、学校は企業と違います。景気が悪

くなってきた、需要が減った、採算が合わなくなってきたと。これは簡単に切り詰めていいものかということを行っているのですね。ですから財政ということに、当然なりますけれども、これは一緒に考えられない問題だと思います。

それともうひとつ私が疑問に思っているのは、先ほどの資料3で出されました、既存の学科に関する県民意識というのがありましたけど、むしろ話題になると思うのですが、必要性をどのように考えて、これは相関関係はどういうふうに見ていったらいいのか。普通科ではそこに示されております91.8%。それで国際教養科ですね、これがかなり「必要である」というのと「どちらかといえば必要だ」というのをプラスとして見ていますけれど、「どちらかといえば必要ではない」「必要ではない」というのをマイナスとして考えてみますと、ここでもやはり80%以上（「必要・どちらかといえば必要」が）あるのに対して、必要でないというのが13.0%ぐらいになる。この相関関係をどういうふうに見て、今後これをどういうふうに進めていくのか。教養学科というのを切っていくのか、あるいは総合学科にしても、そういうことが言えると思うのです。

「必要」「必要である」というのをここを見ると84%になるとして、マイナス面で「必要でない」「どちらかといえば必要でない」ということで、これをやっていくと12.5%ぐらいになる。

この相関を、県ではどういうふうにお考えですか。パーセントが少ないから、この学科を切るということをするのか。そうしていくと、やはり全校的に先ほど来から出ている大規模な学級数を、ある程度を減らすのか。それと必要でないとした学科のほうも切っていくと。そうすれば、生きる、存在する学校というものが出てくるはずなのです。

今までも考えさせていただいて、とにかく都市部中心なのです。地域高が削られていく現状です。こういった点もどういうふうに考えていられるのかということでありまして、当然ながら議論が絡まっていけばありがたいですけれども、旧学区制といったもので地域の実情というものを真剣に考えていかないと、禍根を残すのではないかなと思っております。

（中村委員長）

先ほどご指摘いただいた、6学級以上の定員の数のことでもあります。後ほど取り上げて議論をしたいと思います。

（牧 委員）

2回、3回分休ませていただいて4回目に来ましたが、もう少し進んでいるかと思って来ましたが、留守の間にも事務局から資料をいただきまして、状況等は承知しておりますが、もう少し、原点に戻って進めていかないと出来事、出来事をひとつずつとらえて報告するやら、何やらする形になると、進んでいかないと思います。

確かに教育は、お金でも買えないし、企業でもないし、それは慎重に現実を踏まえてやっていく必要があるし、将来的にも慎重に対応しなければいけないということは、皆さんお分かりになっていると思います。

ただし、今の県の環境の中で、ひとつのシーンとしてこういう環境を打破してくれということですから、改革をするということですし、県立高校ですから我々の税金でやってい

るわけですが、そういう環境の中にあると思うのです。改革をするということを前提に、この推進委員会がある以上は、それを承知した上でやはり進めなければいけないと思います。

個々の事情や、今日来られている皆さん方にも、それぞれの立場もあると思うのです。ですから、そういうことを抜きにして、この議題である4つの項目を、もっと明るく進める必要があると思います。何か来ていると、県のやっていることをみんなダメだというような話になっているのです。そうではなくて、マスコミ等もいらっしゃるのだから、もっとオープンに意見交換を言えるような、そういう論議をしようじゃないですか。

私は、県民の1人として、大いに改革をすべきだと思っています。大いにやればいいんです。それで今お話があったように、多部制・単位制の問題だとか、総合学科の問題だとか言っていますが、一番大事なのは普通高校をどうするかということだと思うのです。一番関心事です。

私は海外に会社がありますから、様子がわかるのですが、本当に今、アジアの学生たちはどういう勉強をしているかといったら、想像がつかないくらい真剣にやっていますよ。特に日本の近隣の国では。そして競争が激しい。実社会に出れば、実力主義です。すごいです。我々経営者でも、その場でイエスかノーかを求められる時代です。「いや、来年考えます」「再来年考えます」では、「結構です。他をあたります」となります。

実際に今、動いている社会、あるいは経済の仕組みの中で、今の高校生たちが、あるいは子どもたちがもっともっと考えなければいけないこと、親がフォローしてあげなければいけないこと。先生がしてあげなければいけないこと。多分そういうことだと思います。

ですから実業高校が志望者が少なくなっていくことも当然であり事実です。何で実業高校へ行ったのか。普通高校へ行けないから、実業高校へ行って、実業高校から短大だ、専門学校だ、4年制大学だ、あるいはその上だというふうになっている実態というのは、長野県だけではないと思います。海外へ行ってもそうです。学歴主義です、完全に学歴主義です。学校をでなければ、賃金は上がらない。そういう実態があるわけです。日本の空洞化は何でこうなったのか。海外へ出る方が、賃金が安い、何もかも安い、税制も含めて企業に進出しやすい環境になっていますが、ただそれだけの問題ではないです。マーケット自体が新しい国に移っているという部分がありますし。確かに小中学校の義務教育、高等学校の義務教育ではない公立高校をどうするかというに至って、ある部分では義務教育ではないのだから、もっともっと現実の環境の中でどうあるべきか、高校生がどうあるべきか、高等学校がどうあるべきか、世の中がこれからどういうふう to 受け入れるかということ念頭において、魅力ある高校づくりを話したほうがいいと思います。

企業が求めている子どもたちと、子どもたちが企業に求める段階というのがあると思いますが、感覚がちょっとずれています。まさに今、日本の企業は非常に病んでいます。大企業もです。「おまんまが食えない」のです。やっぱり付加価値生産性を高めて、新しいビジネス、新しい技術を構築することによって、日本はこれから再生していかなければいけないというのは、我々製造業の中で合い言葉になっていますが、それが実態です。

商業のこと、農業についてはよく分かりませんが、確かに農業だって、これからどうしようと。地元の農家を見ても、みんなその辺の話は聞きます。

私のいる須坂には工業高校はありませんが、商業高校から、農業高校から、工業の関係

の機械のオペレーターとか、あるいはシステムエンジニアになるための教育を、社内でやっております。なぜかと言えば、そういうことを知っている生徒はどこにもいません。工業科がないですから。長野工業か中野実業高校しかないですから。

もう少し具体的に魅力づくりをどうしたらいいか。私は前にも言いましたように、教育に対しては素人ですから、ここで結論を出す必要はないと思います。教育委員会にプランで練ったものをいただいてもいいと思うのです。当然学校の関係についても、最初的时候も、私は自分から名前を言うのであれば、委員を降りますと言いました。当然県の教育委員会で、こうしよう、ああしよう、名前を統合しよう、何をしてもいいと思うのです。何もやらなかったら、これは進展しませんので、ぜひ前向きに改革ができるように委員会で進めていただければいいんです。何か毎回、ひとつひとつの言葉に対して、ああでもない、こうでもない、そうでもない、全然進んでいきません。

（中村委員長）

3 回程度は、用語の解説、それから皆さんの共通の理解は非常に大事だと思います。総合学科というものが、きちんと理解をされないと、どこに配置しましょうかというような問題も、かなり皆さんの思い描いているものと議論がかみ合っていないと感じました。

それと多部制・単位制も、定時制だと一概に言われる方もいらっしゃいます。それはきちんと内容を、どういうシステムなのかを理解しないと魅力へ持っていけないと思うのです。だから3回くらいにわたって、もちろん議論も中には含まれていましたが、用語の解説していただいたり、資料の提示をしていただいたりして、議論のベースをつくったと私は考えています。

もう既に、第3回のあたりから多部制・単位制については、坂城に一局集中ではなくて、もう少し分散して置いたらどうかというようなご意見も出てきています。これは、ほかの校名を挙げるという前に、やはりシステムを考えなければいけないと思います。

具体的な校名が挙がるのは、この推進委員会では私はずっと難しいと考えていましたので、教育委員会さんが、候補案を挙げていただいたことは、非常に議論が進みますし、県民も確かにそこに集中して考えていただけるし、それに対して意見も上がってくるだろうというふうに考えていますから、候補案を挙げたことは評価したいというふうに元から申し上げています。

今、牧さんから言っていたように、具体的にということが、校名を挙げるということではないですね。

（牧 委員）

校名を挙げるというのは、ただ、魅力ある高校づくりというこの指針が出ているのですから、それに対してどうやって具体的に。

（中村委員長）

議論のイメージでしょうか。ですから私は前回から議論がスタートしたのではないかと思います。多部制・単位制について、中沢委員がいろいろご心配されていること、給料の問題だけではないし、少人数の問題だけではないし、ということで議論が始まったと思う

のです。もう少し分散したらいいのではないかというのが、対案というような形で出てきました。

議論は、まだ進んでいませんので、ここで今回、もう少し深めたい。それから総合学科のほうも、丸山委員のほうからデメリットに関する、他県の実況を示していただきました。もちろんデメリットに長野県のシステムが陥るというような心配が最初からあれば、そこへ行かないわけですから、それを利用していい方向へ総合学科を生かしていければいいと思います。

それから中学生のアンケート結果、資料1ですが、これはずっと前から出ていますが、「どのような高校があってほしいですか」、これはまさに魅力ですね。その筆頭に「分からない教科の内容を、もう一度基礎から分かりやすく学ぶことができる高校」。それから「普通科目から、興味・関心や進路希望で選択する単位制普通高校」。この辺で77%以上ですね。こういうふうに中学生は思っているわけです。これは中学校の教育に、多少課題があるのかなと、私は思ってしまったりもするのですが、やはりこの辺が今の中学生が、これから勉強したいという希望を持っているわけですから、かなりウエイトを占めて考えていかなければいけない。

そうすると総合学科というものが、ある程度2番目に多い魅力として考えられるのではないかと思いますし、普通科ももちろん大事だというふうに、今、牧委員のご意見でしたが、一番大事だというご意見だったと思いますが、まさに魅力にあっていると思います。

そういった議論をしていくのですが、どこに配置したらいいかというようなことで、これは教育委員会のほうで提示していただいた案が、たたき台として生きてくる。それがベースになる。それに対しては、白紙撤回などご異論もあるでしょうけれど、やはり推進委員会は改革プランのことに關して話し合っ、そのプランに対するご意見、それから提示されてしまいました候補案に対するご意見をいただく場だというふうに思います。

(丸山委員)

今、牧さんがおっしゃったことで、これからそういう議論がようやく始まるということだと思いますよ。私も、いっぱいしゃべっていますが、決して改革なんかするな、なんて全然思っていないしね。はっきり言いますけど、絶対89校を減らすなとも思っていない。

だけど本当に、未来の皆さんや、地域の皆さんや、それから中学生、つまり受けるほうと受け取るほうと、その入り口を出口の關係も含めて、どういうふうに特色づくり、魅力づくりをしていくかということが今すごく大事で、今、牧さんが言ったようなことを含めて、「じゃあ総合学科は、そういうのに応えられるの」ということなのです。私は、個人的には応えられないと思っています。

それからもうひとつは、さっきの委員長さんがおっしゃったアンケートの、「分からない教科の内容をもう一度基礎から分かりやすく学ぶことができる高校」というのは、一番多いわけです。これはつまり、基礎的な学力がなかなか付けられなくて、あるいは基礎的な教科、普通の教科、その力を付けたいというのが親も生徒も持っているということで、そういうことに応えられる学校というのは、どういう学校かというところを、やっぱり議論すべきだと思います。私はそれには、一定の考えを持っていますけれど、それを総合学科、多部制・単位制だけでは応えられないでしょうというのは、私は思うのです。

そういう点では、やはり総合学科、多部制・単位制を各通学区に1校ずつつくるとなっているけれども、本当にそれでいいのかということも含めて、あるいは今の職業科はどうか。あるいは確かに普通科はどうか、普通科などは両極分化していますが、がんがん進学やるところと、それから本当に生活の基本も成り立たなくて、いろいろ問題を起こしたり、いろいろな悩みを抱えている生徒たち、学力のない生徒がいる、そういうのを抱えて本当に苦勞している学校はどうか、必要じゃないのかとか、そういう部分を含めた議論をこれから、特色づくりをしていく。

確かに時間は掛かったけれど、ようやくその入り口に立ったと思います。そういう議論をこれから。さっき委員長さんもおっしゃったように、魅力づくりというのをどういうふうに、本当にただ魅力づくりというのを私が県教委や検討委員が出した案で、そのとおりにやればいいのかということではなくて、それもひとつの参考資料だけれども、実態から見てというのが地域で必要なのか、地域の皆さんはどういうふうに思っているのか、そういうところもしっかりこれから意見を聞きながら議論をしていくことだと思います。

だから、そういう議論の方向でいいのではないかと思います。

（中村委員長）

推進委員会の議論の状況も、牧委員に説明していこうと思うのですが、よろしいでしょうか。

（牧 委員）

2回連続で休んでしまったことは、申し訳ないのですが、それにつけてもスピードが年度末に向かって終わらせたいと言っているのに、全然進んでいないので、いかがなものかと。

（中村委員長）

慎重審議とご理解いただければいいと思います。

（牧 委員）

やはり、議論するにしても中身が大事であります、今までの中身であれば、それは報告だけだという話であって、そんな具体的な話し合いではないですね。

（中村委員長）

それでは、やはり具体的な意見が出やすい、単位制・多部制、総合学科について、残り時間がまた少なくなってしまうかもしれませんが、進めていきたいと思います。

（小山（壽）委員）

多部制・単位制、それから総合学科について、議論を進めるということも結構ですが、魅力づくりといったときに、前回もちょっと申し上げましたが、一定の規模を学校が有するというのも重要な学校の魅力である。当然長野県のような、地域と交通の便の問題や、広大な地域を抱えておりますので、小規模になったからといって、高等学校教育を保障す

るという観点から、存続をさせていかなければいけない、そういう学校も当然ありますが、しかしそういう条件がある程度緩い地域によっては、やはり一定の規模を学校が持っていないと、生徒に対して選択科目を用意しなければいけない。あるいは、その専門の教員を確保したい、ということが、難しくなってしまう可能性が高い。あるいは、クラブ活動の数も限定されるということもありますので、ある規模を有するということの、やはりこれは高等学校の魅力ということになるのではないか、ということです。

それから、多部制・単位制だとか、総合学科を議論していくときに、注意していただきたいのは、例えば丸山委員さんのこの前の報告書に私が心配したのは、いわゆる昔でいうと職業科ですね、農業科、工業科、商業科を、すべてなくして総合学科にしてしまうということではない。職業科は拠点校として、各地に配置して、そして今の4つの通学区にひとつずつの総合学科をつくる。これは県によっては、総合学科を乱立させています。しかも非常に生徒が集まりにくくなってくる、普通科志向が強くなってきている、というような中で職業科が非常に苦戦はしていると。そこに、じゃあ総合学科にして、生徒集めをしよう。こういうふうにして総合学科にしていったという県も、幾つもあるわけでして、それと同列には考えるべきではない。

多部制・単位制にしてもそうですが、これも通学区にひとつということで、一方において、それをつくったからといってありとあらゆる今の定時制課程を持っている学校を全部なくしてしまうというわけではない。議論は、できるだけバランスを取りながら進めていくべきだというふうに、これを取るかあれを取るかということではないというような感じをしています。

(中村委員長)

ありがとうございました。

10分ほど休憩を取りまして、その後再開したいと思います。

では、3時5分まで休憩ということにします。

【休憩後再開】

(中村委員長)

それでは、再開したいと思います。市川委員さんは、所用でご退席されましたので、ご承知おきください。

それでは、どういうふうにしていいかわからないのですが、私が以前から思っていたことで、魅力づくりというふうにずっと言われています。学校要覧、それから各校の魅力づくりに関するアンケートの結果をすべて並列でまとめられた資料等を提出されていますが、やはりこの推進委員会の場では魅力づくりといった場合に、私はシステムのほうをひとつ中心的に考えていただけたらなと思っています。

例えば先ほど、小山委員から出されました、ある一定規模のことも、それも魅力であるということ。それから配置ですね。推進委員会の考えている範囲の中で、どう配置し、どういう規模で何をしていくか。そここのところのシステムの魅力づくりについて、強く議論をしていただきたいというふうに思います。各校が努力されていることは、素晴らしい魅

力でありまして、すべて私は並立考えていきたいというふうに思います。このような魅力は必要ないとか、そんなことは全然ありませんで、各校が考えておられて既に努力されていることは、非常に大きな魅力だと思っていますので、やはりシステムのほうを中心に議論をしていけたらと思っています。

ということで、お願いしたいと思いますが、魅力づくりという観点で、今日は総合学科、それから単位制・多部制について中心的に、また今までも議論が出ていたわけですが、それについて再開したいというふうに思います。それでは、再開したいと思います。市川委員さんは、所用でご退席されましたので、ご承知おきください。

それでは、どういうふうにしていいかわからないのですが、私が以前から思っていたことで、魅力づくりというふうにずっと言われています。学校要覧、それから各校の魅力づくりに関するアンケートの結果をすべて並列でまとめられた資料等を提出されていますが、やはりこの推進委員会の場では魅力づくりといった場合に、私はシステムのほうをひとつ中心的に考えていただけたらなと思っています。

例えば先ほど、小山委員から出されました、ある一定規模のことも、それも魅力であるということ。それから配置ですね。推進委員会の考えている範囲の中で、どう配置し、どういう規模で何をしていくか。そここのところのシステムの魅力づくりについて、強く議論をしていただきたいというふうに思います。各校が努力されていることは、素晴らしい魅力でありまして、すべて私は並立考えていきたいというふうに思います。このような魅力は必要ないとか、そんなことは全然ありませんで、各校が考えておられて既に努力されていることは、非常に大きな魅力だと思っていますので、やはりシステムのほうを中心に議論をしていけたらと思っています。

ということで、お願いしたいと思いますが、魅力づくりという観点で、今日は総合学科、それから単位制・多部制について中心的に、また今までも議論が出ていたわけですが、それについて再開したいというふうに思います。

(丸山委員)

休憩前に小山委員さんのほうのお話もありました。当然、そのとおりだと思いますが、ただこの総合学科の関係で言いますと、私がああ資料を出したのは、確かに全国の話ですが、その総合学科を職業科を転換することでつくるということで本当にいいのかという問題を言ったのです。

職業科を、一極集中で重点化して、学区にひとつずつの職業科でいいではないかという極端な議論も県教委の内部にもあったりしたわけです。それでいいのかという問題で、先ほど牧さんのほうからも出ましたが、工業科も農業科も商業科も適当なバランスで配置されるということの魅力というのもあるわけです。

その辺の産業との関係とか、卒業生の出口の関係、そういう問題との関係で、本当に総合学科でいいのかという問題がひとつあります。それからもうひとつは、例えば、この先ほどのアンケートとの関連ですが、分からない教科の内容をもう一度基礎から分かりやすく学ぶという、これはかなり重い意味があって、それをきちんと受け止められる学校も数校は必要ではないかと思います。そしてその規模というのはどれくらいなのかなという問題があるわけです。



私は、この規模をかなり小さい規模じゃなければ無理だと思います。つまり学力がまだ定着していない子どもたち、あるいはいろいろ問題を抱えて、家庭の問題から自分の問題も含めて、すごく複雑な問題を抱えている子どもたちを、本当に丁寧にやれる学校というのは、へき地であろうと都市部であろうと必要だというふうに思います。それは、総合学科でいいのかという問題があるわけですよ。そういうことで出したわけです。

それからもうひとつ、ちょっと先走って言ってしまうと、先ほど小山委員がおっしゃったように、確かに他県では総合学科の乱立という状況もあったりするわけです。だからそれはいけないと思いますが、それとの関連でいうと、皐月の問題はこの第1通学区では外せないと思います。皐月がどんな総合学科をつくらうとしているのかという問題と、皐月ともうひとつ総合学科があった場合に、それが、その関係がどうなるかというのは、かなり重要だと思います。

皐月は公立ですし、通学区関係でいうと、通学区の中に組み込まれるわけですから、私学ではないわけですから、やはりそれなりの関連性が出てくると思います。それでいくと、例えば県立でもう1つつくったとして、その皐月との関係はどうなるのかというのは、この学区の中でいうとかなり大きな問題です。その2つの総合学科は、競い合って両方ともよくなっていけばいいですが、そうではなくなったらどうなるのかという問題が非常に大きい。

そういう問題で、総合学科をどう配置するかという問題と、総合学科は総合学科でつくってもいいかもしれませんが、職業科と、それから学力の付いていない非常に丁寧に指導していかなければいけない子どもたちを受け入れるような学校をつぶしていいのかという問題は、そのシステムの問題として、配置の問題としてかなりあると思います。そういうことの議論をしていく必要があるのではないかなと思って出したわけです。

（中村委員長）

規模が小さいほうがというのは、全体の学校規模でなくてもいいわけですね。少人数編成でも対応できるし、そういうことでよろしいかと思います。この辺に関連して、ご意見はありますか。

（坂口委員）

魅力ある学校づくりということで、システムを中心という、委員長先生のお話があったわけですが、先ほど中3の生徒のアンケートが出ました。私もちょっと、ここにかかわっているもので、3年生に書いてもらった部分があります。

そうすると魅力ある高校（こんな高校があればいいな、こんな高校に入学してみたいな）ということで、もちろんこの問3にかかわるような学校を選択の部分、あるいは学科コースとありますけれども、意外と子どもたちが多いのは、人とのかかわりを求めている、すなわち櫻ヶ岡中学校の教師がよかったのか、逆にうんと悪かったからなのか、この分析が非常に難しいのですが、やはり高校でも、本当に私たちの立場を分かってくれて、日々一生懸命対応してくれる先生がいる学校。あるいは先輩とのかかわりで、いじめがなかったりとか、本当に部活動、生徒会活動を楽しくやっていける高校。そういう人と人とのかかわりを求めたいという、やはり今の中学生は結構いるのだなと思いました。

本校の生徒は、そういうことを書いてくれた生徒が非常に多いということが、私たちは分かりました。やはり、高校の魅力というのは、そういう人、もっと言えば、高校側での教師の姿勢とか、これはもちろん義務でも、まったく同じだと思いますが、教師の資質というものも、非常に大事な魅力あるものをつくる側の努めになっていくのではないかなと思います。ただシステムだけ、あるいはいろいろなコースだけをいろいろ整えても、そこにいる、教育する、あるいは指導する、教師側の資質というものも、非常に問われてこなければ、これはいくら学校を統廃合して、総合学科等をつくってみても、それも大事な側面であるけれども、やはりそこでかかわる、人と人とのかかわり、それも非常に大事に考えていかないと、これは子どもたちにとってみれば、また行ってはみたけれども、いろいろな子どもたちの関心、ニーズに応える学校はできたけれども、本当に満足できるのかということになると、ちょっと心配で、そんなことを子どもたちの声から感じました。

ですから総合学科、あるいは多部制・単位制、これもひとつの大事なところではありますが、第2回の資料2で出していただいた、学校の自主性、自律性の構築にかかわる事項ということで、魅力づくりの例で、やはり人事の例とか、あるいは教職員の研修の面とか、そういったものも、やはり考えていかないと、ちょっと片手落ちになるというか、建物ばかり、学校のハード面というかソフト面というか、ちょっと心配な部分があるかなと、そんな面をお願いも兼ねて、お話しさせていただきました。

以上であります。

(中村委員長)

私の説明が、足りなかったと思います。

各校が努力されていること、例えばこんな行事があります、それがここはその行事がない。こっちはやっているということが魅力というよりは、学校の配置、規模、その他そういうシステムですね。ハードに限った形ではなくて、そういうものを中心にお願したいというふうに私は考えていました。

先生方が努力する、研修のシステムを持っている、それはある特定の学校の話というよりは、この高校のシステムの中ですべての高校が努力していただきたいということですから、私はやはりシステムの話に含まれていると思っています。

ちょっと説明が足りなくてすみません。ハードに限ったことではございませんので、どうぞそのようなご意見もいただきたいと思います。

(小山(元)委員)

中学のほうから、今、大事なお話を出してくれましたね。実は、今日資料8で出していたいただきました公立高等学校中退学者の関係なのですが、私は毎年、やはり県で出されたものを職員室で見ながら、本当にもったいないなというのを一番感じています。

例えば、今年は6月15日の水曜日に新聞紙上でこの資料が発表されています。その次、やはりこれと同じので高校中退者853人という見出しで、22年ぶり1,000人を下回る。これは大いに結構な話であるなと思いつつも、しかしこの数字だけで見ていきました場合、今日出していただいた資料の8のところ、一番下のところでしたね。今年入学した1年生の全日制を見ると383。それを40人学級で見ていくと、これは大変なことですね。

例えばひとつの高等学校で募集している定員を超えてしまう。こういうことが今までずっと出されてきていて、これをどのように解決するのかなということ。例えば紙上では、このようなお話が出ています。県教委教学指導課のほうの話として、各学校の相談専用電話や面接などの粘り強い指導を挙げている。先ほどもまた、県教委のほうからもご説明がありましたように、非常に各学校で努力している様子は分かります。高等学校の先生方も本当にご苦労さまだと分かりますが、こういう数字だけ見ていくと、最初お聞きしたのは、私は平均していますかというのは、そういう意味でお聞きしていたわけです。

例えば 200 人募集の学校とすれば、これはもう 4 校存在してしまうのです。そういうことから考えていったときに、今までの魅力づくり、一生懸命やっているようですが、当然、中学から送る、高校で受け入れる。そして毎年これだけの退学者が出る。いろいろな事情はあると思います。それに対して、魅力づくりをどういうふうにやってきていたのか、ということはやはり大事に考えていく必要はあるし、それがこの我々の推進委員会でも問題にすべき内容ではないかと思います。

これから、どういうふうに魅力づくりをするというのは、もちろん大事ですけども、今、どういうふうに実際に学んでいる子どもたちが、また来年、これだけの数が退学するかということも、やはり考えられるわけです。

だからそういう先を見ながら、大事に、現実の数字との受け止めが、じゃあ中学から送る、高校で受け入れる。それで中高との連携を、我々みんなで大事に見ていかないと、いつも毎年これだけの数で、「ああかわいそうだな、一生懸命やっている子どもたち、またどういう環境になるのかな」と懸念しているわけです。

そういうことを、大事な問題にさせていただければなと思います。

以上です。

(中村委員長)

事務局、もうちょっと説明をしていただきたいのですが、資料 8 は、中退者数はどんどん減っているということですか。これはどういうことで減ってきているのか、その辺のご説明をお願いしたいと思います。

(柳澤教育主幹)

これだという決定的な理由ということはないかもしれませんが、さまざまな取り組みをしてきております。中退者が 1,000 人を超えるという大きな学校が 1 校なくなるというようなことで、大変大きな教育課題としてとらえまして、さまざまな施策を講じてまいりました。

例えばスクールカウンセラーの配置ですとか、あるいは相談体制の充実と。今、小山委員さんのお話がございましたけれども、中高の連携というようなことで、生徒指導の連携のいろいろな施策を取ってまいりました。

そういったもろもろの積み重ねがあって、こういうふうに減ってきたのかなと思っております。平成 16 年度で 853 名、これは減ったとはいえ、決して少ない数ではないわけですので、引き続きさまざまな施策・努力をしているということでございます。

(中村委員長)

ありがとうございます。

ほかにご意見はありますでしょうか。

(小山(壽)委員)

今、坂口委員さんや小山委員さんから出たことについて、高校側として十分各校とも努力をしていかなければいけないと思っております。

前回、この北信地区の学校がそれぞれ学習面、生徒指導面で、これこれこんなふうな努力をしているという一覧が、各学校ごとに出ておりますので、ぜひご覧をいただきたいと思いますし、生徒の今後の高校への進学にあたって、自分にとっていい学校はどのかなだろうかと考える資料になるのではないかと思います。

先ほど丸山委員さんから、わからない教科の内容をもう一度基礎からわかりやすく学ぶことができる学校というのは、ぜひとも必要であるというお話がありました。この学校については、規模は大きくないほうがいいという話があり、私もそのとおりだと思っております。

やはり97%の子どもたちが、高等学校へ進学して来るという現状からいいますと、十分中学における学習が、身に付いて高等学校に来ているというわけではありませんので、これらの子どもに対して、あらためて基礎的な学力を付けていく。また彼らも基礎的な学力を身に付けたい、こういう思いに応えていくということが、高等学校として必要なことではないかなと思います。

先ほど私が申し上げましたことについて、ちょっと補足していきますと、そういう生徒たちの学力に、対応していくためには、当然学習集団のサイズを校内において小さくしたりしていかなければいけないわけです。そうしますと、必然的に授業時数が増えていきます。これが増えていくということになると、当然ある程度の教員がいなければ、教員にいずれも過重な負担が掛かってしまうということになります。まずその点で、ある程度の規模がないと魅力づくり・特色づくりをする上でも難しいというふうに申し上げたわけで、規模というのはそういう意味で、手厚い指導をしていくためにも必要なのだということです。

ただその規模は、ではどのくらいなのだというところになると、これはさまざまな条件が出てくるだろうと思っております。それから地域的な交通の関係で、小規模であっても残さなければいけない学校というのが、必ず長野県の場合にはあると申し上げました。

そういう学校に対して、当然教員を加配する等の手だてを打っていくということになれば、都市部の学校については相当の規模をきちっと確保しておいてもらわないと、小規模校への教員の加配は当然できなくなって、ということになります。

例えば、2学級下限で3学級くらいあれば、1校として存続していける。都市部で3学級規模で存続していくということになると、当然2学級でも存続していかなければならない学校、そういう学校への教員配置が非常に難しくなっていくだろうと思うわけです。

従ってある種のサイズというのは、魅力づくりのためにも必要だろうし、同時に都市部で相当程度の学級数を維持してもらわないと、いわゆる地域高校への教員の配置が当然苦しくなってくるだろうと思っておりますので、その辺の部分は十分配慮してもらいたい。

それからもうひとつ、必然的に学校数が減っていけば、今よりも学力差の大きい生徒がひとつの学校の中に当然存在するようになるだろうということが予想されるわけです。そこについても、当然学力が上の子には、上の子なりの対応、学力の低い子には低い子なりの対応を、ひとつの学校の中でやっていかなければいけない、そういう問題が出てきます。

当然そういう学校についても、教員数が減らされてしまうとなかなかそれぞれの生徒に対応していくのが非常に困難になってくる、そういう問題もあります。だから規模の問題を考えていくときに、県下全体の学校がどうなるのかということも非常に重要だ。少子化を控える中で、やはり校数がある程度減っていく。減っていくことによって、資源をある程度集中的に投下できる、そういう条件づくりをしておかないと、弱い学校がいくつもとできてしまうという状況が出てくるのではないかと、そういう心配を持っています。

（塚田委員）

規模ということでは、今、学校の現場、校長先生のほうから、当然、教員の確保ということについても考える必要があるというお話があったのですが、多分そのとおりだとだんと思っています。

それから、設備という、ハードという面からしても、やはりある程度の規模はないと、子どもたちに教育する上にも、例えば体育館ですとか、図書館ですとか、そういったハードの面からいっても、ある程度の規模がないと子どもたちに十分な教育を提供していくことはできないと思います。

ですから、6 学級というような数字が出てきますけれども、これが多分相当適正な数字ではないかというふうに思います。それから、先ほど今、7 学級、8 学級あるのはどうするのだということですが、私はそこで 1 学級、2 学級増えても、そんなに大きな影響はないのではとおもいますので、もし 8 学級、7 学級あるものをわざわざ減らすことはしないということです。

ただやはり、1 学級、2 学級しかないというのは、先ほどの教員の配置ということでも大変だと思いますし、それから子どもたちにハードという面での教育環境を提供していくことでも、やはり大変だと思いますので、そういう面で 6 学級という数字というのは、相当根拠があると考えています。

（牧 委員）

私も今、塚田さんのお話にあったように、話のまとめ方とすれば先生もおっしゃったように、やはりシステムを考えるべきだと思います。どういうシステムに対して、ハード面、ソフト面を考えていくか。ですから、論議の基本になるのは、やはりシステムづくりを、魅力ある学校づくりをどういうふうに行っていくかというのが問題です。

今、具体的な話も出ましたが、私は大規模校を残すということは、これからはやはりやっていかなければいけないというのは大賛成なのですが、意見の違う方もいらっしゃると思いますが、やはり 15 歳から 18 歳の意気盛んな時代に、地域のことが分からないことがある。ここでしか勉強しなかったというよりも、私はいろいろな感性のある生徒が集まった環境の中で、文武両道ですよ。勉強もし、スポーツもし、文化活動もし、いろいろな体験をした中で育つことの素晴らしさというのは、必ず将来生きると思います。

ですから大規模校にあっていろいろな選択ができるということが、私は地域の子どもの中でもかなり大きなぶつかり合う感性の中で育つことがある、将来役に立つひとつの土壌になるのではないかと考えています。

小規模校の残し方、これも地域によっては当然あっても結構なのですが、やはり大規模校の魅力というのが、きっと将来子どもたちが実社会に出たとき、それはどんな職業に就こうと、それは今までの自分の体験だとか考えた中で、実社会に出たときに生きる力が大きくなるのではないかと感じはしています。

やはりそんなことも十分検討に入れていただきたいなというふうに思います。

(中村委員長)

ありがとうございました。

学級数の多いところの話にも、議論が及んでいますが、関連してありますでしょうか。

(丸山委員)

今の意見は、確かにそのとおりのところもありますが、私はちょっと今の子どもたちの現状からすると、それでやっていける子たちは、もちろんいますよね。だけどさっきの退学者を含めて考えると、退学者の中で多分不登校だったり、資料にありますように学校不適應というものがありますね。学校不適應というのは、学校生活、学業不適應というのが、本来ですとこれはほとんど不登校なのです。その学校が合わなかったということも、もちろんあるかもしれませんがね。だけど、不登校というのが非常に多くて、あるいは中には病気を抱えているみたいな子も結構多いのです。例えばうちなんか特にそうです。

そういう点でいうと、そういう子たちもかなり増えているという面も、やはり考えてもらわないと。そういうことも考えると、確かに大規模の中で切磋琢磨(せっさたくま)して、いろいろな地域から、いろいろな人が来ていて、もまれて、そして成長していく、それが青春そのものだというのは、もちろんそのとおりなのだけど、それに耐えられない子どもたちも結構、今、増えているという状況が、これは大問題で実は日本の社会も大問題だと言われているでしょう。その辺のところを、第一にまず考えるべきで、ただ単に私が言ったのは、先程の学力が身につけていないところをじっくりやりたいという、そういう要望もあるので、小中の中になかなか学力も付かなかったとか、あるいはそういうことで出て来なかったとか、中には本当に集団の中にも入れないという子もいますからね。集団を見ただけで怖くなってしまう子もいるわけです。

それを含めて、そういう子たちには、やはりそういう少人数というのはすごく大事だし、もっと言うと、学級規模というように、私は30人学級をやればよいと思うけど、30人学級の問題も含めて、やはり考えていくべきだと思います。ですからそういうことも今度の場合には、また後でどこかで私もしっかり言いたいんだけど、今の改革プランというか県が出した案でいくと、30人学級というものはかなり先までないかないとできません。それでいいのかということもあるわけです。

そういう点でいくと、今のおっしゃるようなことはあるけれども、もう一方ではそういう深刻な問題が実はある。それがやはりいわゆる「困難校」と言われている学校の実態と苦悩だし、それから定時制や何かで今苦労している点なのです。そこはやはり、小さい学

校だったからこそよかったというのが結構あるんです。小さい学校だったからこそ、人間的な関係で、先ほど坂口先生もおっしゃったけれども、人間的な先生とか人間的関係が生まれて、やっとそれで立ち直れたというか社会へ出る力を付けたというか、そういうことも結構あるのです。

（牧 委員）

私は、一概にただ仕組みの中で、ソフトもハードも考えればいいと言ったのです。さっき小山先生もおっしゃいましたが、同じ普通高校であっても、それは普通科の学科は勉強するのだけど、例えばAコースとBコースとCコースがあってもいいと思うのです。

ですから大規模校であってもすべて同じではない。やはりそのコースによって、また特色があったり、あるいはバリエーションをつけてクラス分けするということがあっている。子どもたちも社会にも、先生方の社会にもあるものですが、我々企業の中にも最近はずいぶんストレスがたまって、皆さん、社員も経営者も、ストレスがたまっています。

こんなに世の中が複雑になって、スピードが激しくなった時代の中で、日々生きていて逃げ出したくなるほどストレスがたまりますよ。親のストレスを見ていて、子どももストレスがあると思います。それを言えばきりがありませんが、じゃあ弱者救済しなければいけない。これは社会的にやっていかなければいけないことだから、学校だけが問題にするわけではないし、企業だってメンタルヘルス問題もありますし、当然とらえなければならぬ。今は、どこの企業だって、相談員を置いています。かつてはなかったです。社員のための相談員。まさにメンタルヘルスです。

何でもそうなのだけど、それはソフト面で考えればいいはずであって、原理原則をどうするかということかは、また別だと思うのです。ですから、ソフトの話まで別途お話しさせていただく中で、もっともっとやはり、突っ込んで話をすべきだと私は、そう思います。

（塚田委員）

今の丸山先生のお話と小山先生のさっきのお話と、ちょっと食い違う部分が出てきていると思います。

小山先生は、やはりそれだけ学力が伴っていない子どもたちを教えていくには、やはり先生たちに相当負担が掛かっているのだろう、そういう意味では先生の数が必要じゃないかということですよ。そのためには、ある程度の規模が必要だというお話で、私はそれはよく分かります。特にさきほど、坂口先生が言われたように、教師の質の問題、例えば教師にどれだけゆとりがあって、教育に取り組めるかということはすごく大切なことだと思うし、そういう意味では先生方に時間的なゆとりもあるというのは、当然必要なことだと思うので、そういう意味では、先ほど小山先生が言われたように、ある程度の規模があって、ある程度の教員数がなければ、ゆとりをもってそういった学力の幅のある子どもたちに取り組むことができないのではないかと思います。

(小山(壽)委員)

私は学校現場の者ですから、丸山さんからああいう話を受けると、まったくそのとおりだと思うのです。だから塚田委員さんには申し訳ないのだけど、やはり一人一人の子どもを見ていくというのは、本来だったら小さな規模の学校でできるのだというふうに、小さなほうが本当はいいのです。丸山委員さんがおっしゃったとおりなのです。やはりいろいろ手がかかるのです。

ただ、それができるか。現実の問題との兼ね合いの中でいうと、一定のサイズがないとそれは難しいだろうと。ただ、一定のサイズというときに、どのくらいのサイズというのか。8 学級というサイズでは、これはもう難しいと思います。生徒の名前と顔が全然一致していないという困難、大変難しいと思う。

丸山委員さんの話の中で出てくる、例えば不登校、それから集団になじめない子、いますよね。そして今、さらに増えていますよね。ただそういう子たちには、小さい学校へ行けというのか。それはできないですよ。やはり学校とすれば来た子を受け止めていくと。どれだけそういう子たちを、集団の中で育てていくのかという視点がどうなっているのかなと。

先ほど中退者が減ってきているという理由の中に、スクールカウンセラーとかそういう問題が挙がりましたが、相当現場の先生たちが苦勞をしているということや、それからかつてだと、学校も内規があってかなり一律に内規を厳格に当てはめて、進級ができないようにする。従って「どうするの」、「じゃあ、やめます」と。あるいは定時制へ行きますと。通信へ行きますと。そういうふうにやったのを、内規を非常に弾力的に今、適用するようになってきた。学校のありようそのものが非常に弾力化してきている。

弾力化してきているということは、一方において怠けている子どももいるわけで、そういう子たちに対する指導をどうするのかという問題も出てきて、非常に難しい綱渡りをしている。そういうような現場の努力によって、中途退学の生徒がかなりここへきて減ってきている。やっぱり中途退学をさせるよりは、できるだけ引き受けたところで、最後までまっとうさせてやりたいというものの考え方の中でやっているのだと思うのです。

これは、最後の問題でちょっと意見が違ような話になっていますが、実際現場のことを考えればサイズは小さいほうがいいし、勉強の集団だって小さいほうがいい。ただ現実的な問題として、多分難しいだろうと。受けなければいけないのだから、ある一定のサイズにし、教員を用意して、学力枠の広い子に深く対応できる学校をつくっていく必要があるのだと思います。

(中村委員長)

高校も、学力に応じたクラス編成がされているのですか。

(小山(壽)委員)

学級編成をそのようにしているという例はほとんどないと思いますが、授業の学習集団については、習熟度別を導入している学校は多いです。



(中村委員長)

学力に関しては、そういう対応が十分なされていると考えてよろしいでしょうか。

(小山(壽)委員)

そうです。前回の資料を見てもらうと、コース制を取っている学校がたくさんあると思います。コース制というのは、自分の進路に対応したコースを選択するわけで、それはある種の学力に対応したというところがあり、本人の希望によって分かれています。

(中村委員長)

それをやるには、学校規模がないと教員の数が厳しいということですか。

(小山(壽)委員)

そうです。一定の数がないと、難しいですね。

例えば飯山北高校は、理数科がありますが、理科というのは物理、化学、地学それから生物、4教科あります。そうすると最低4人確保しなければならない。今、11学級ですが、4人確保がギリギリです。これ以上学級減で減らされていくと、職員数を減らされるということになり、非常にこれが難しくなってくる。

社会科でいえば、日本史、世界史、それから地理、政治経済があり、これだって4人ですよ。だけど、恐らく3学級規模の学校になると、社会科で4人、理科で4人ということは、恐らくもう確保できなくなっていくのではないかと思います。そういう現状が一方にはある。専門の教員を配置する。それによってやっぱり、学力幅もあるのですが、みんな教育をしていく。あるいは、分かりやすく指導するというのも、ある程度できると私は思っています。

(中村委員長)

続いて、塚田委員、お願いします。

(塚田委員)

丸山委員さんの言われることは、そんなに分からないことではなくて、小規模のメリットであると言われる家庭的なところもそれもいいのだということも分からないでもないけれども、現実問題としてそうだからといって各地区にそういった小規模校を置くほど、現実問題として、そういうお金のかけ方は無理ですね。

そうとすれば、次の手段とすれば、やはり小山先生が言われたように、大規模校の中で習熟度別にそういったものを設ける。それと教員の数をある程度確保して、そういう中でやっていかざるを得ないということです。そういう意味で、やはり現実問題を見れば、やはりある程度の規模の学校を用意するということしか言えないと思います。

(中村委員長)

続いて、中沢委員、発言をお願いします。

(中沢委員)

当初からいろいろ話のある中で、先ほど私が6学級という基準というものがあるとするならば、大規模校などはどうするのかということも論議が必要だということを申しました。その裏には、生徒が増えた時代に、第2通学区の上田のほうは学校にクラスを多くして、そして増やしていったという過程がありますね。それと、第1通学区は学校そのものを増やしていったという、そういう違いがあるわけです。そういうことを思うと、それは必ずしも大規模校だからいいという論理はなりたたない。300人のような企業がいいとか、30人の企業がいいとかという論理と、論理が違うと思います。そうするならば私は大規模校そのものを、そのまま残しておく地域校がますますおかしくなってしまう。地域校というのは、それぞれの地域とともにある学校であり、歴史的な過程があって、その地域に貢献しているわけです。

例えば坂城高校の場合に、卒業生の76%は再び坂城へ帰ってきて、それで企業で頑張っているということは、規模でなくて内容なのです。ですから、そういうことを考えると、規模というものも昔の一時増やした8学級だ、9学級というものもある時期には、それは6学級、7学級ということにやってきて、きめ細かな授業をすることが必要ではないかと。それがまた地域校を生かすことにも通じるもので、そういうお話が必要ではないか。

それとさらに思うのは、こういったものも企業のリストラと同じような手法でものを考えては困ります。一番大事なことは、教育の場で考えていくということ。しかし教育の場で考えているけれども、現在の社会情勢とか、企業活動とかいうものを頭に置きながら、教育の場でこの問題を考えていかないと、こういう時代だからこうだというわけにはいかないから、その辺はもう少しみんなで、準備する必要があるなと思います。

もっと、どういうことにポイントを置いてやっていくかということ、考えていかないと、この問題はうまくいかないなと思います。

それとさらにもうひとつ言わせてもらおうと、ある時期にこれをやると、結論を出すとするならば、この期間にこういうこと、この期間にこういうこと、この期間にこういうことという視点というか、論点をはっきりさせておいて、もうひとつは県から提示されたこの案そのものを委員長さんはひとつの評価だと言っているから、それを通じながら、まずいろいろと検討してみる。そしてまた、それを教育委員会から聞くのではなくて、この委員の皆さんとして、この幾つかの提示された、そのこと自身が各学校地域でどういうふうになそれが問題にされ、それへの対応がされているのか考える必要があるなと思います。

先ほど、宮本先生のほうから、ある地域では学校を見て回ろうじゃないかというお話もあったけれども、時にはこういった中において、今までのそういう提案を、どういうふうを受け止めているのかなということを、委員自身が勉強しなければ駄目ではないか。あるいはまた委員がグループになって、いろいろと対象になった学校を、どこに問題があるかと聞き取るぐらいの対応をしていかなければならないのではないかと。そんなときにも幾つか問題提起をさせていただきたいと思います。

(中村委員長)

各委員さんが、地域からの要望やご意見等も聞いていると思うのです。そういうものは、ぜひここで紹介していただきたいと思っています。

例えば今日の18時からですが、長野市の教育委員会が長野市PTA連合会の役員に対して皐月高校の総合学科の再編の説明をするそうです。懇談会を持つということで。私も、長野市PTA連合会の顧問、役員の立場でお話を聞いてきますので、また次回報告したいと思います。

そういったことで先ほどありましたが、皐月高校の配置もかなり問題だということもありましたので、各地域から代表されている方、実情をお分かりいただいているというふうなことから、関連することはぜひこの委員会でお話ししていただきたいというふうに思います。

(宮本委員)

幾つか小山さんから、退学者の問題がありましたが、きめ細かな指導の仕方とか、そういうことが幾つか出ているのですが、学校規模の問題については概念的でちょっと分かりにくいところがありますが、前回の委員会でも事務局にお願いしたのですが、松本筑摩高校の単位制のことと、第2回の資料のときに、多部制・単位制高校についてというメリットのところ、だいが転入学、編入学ということで、弾力的な運用とか入学、卒業の時期を2回にするとかということで、私自身もこれはかなり魅力を感じていまして、本当に事務局のたたき台にも載っているのですが、必要なのか、改革の魅力づくりになり得るのか、なり得ないのか、この地区に必要なのか、必要じゃないのかということ、あるいは総合学科のことについても出ていますが、具体的に勉強が進んできましたので、先ほど丸山委員からも出てきましたが、それに代わって今までの現状の問題点を解決しうる、あるいはさらに魅力を生み出せる学校のシステムとして必要なかどうかということも、そろそろ論議をして、必要じゃなければたたき台から削除する必要があるし、もしこの地区でたたき台として、たたき台の中のつくったほうがいいとなれば残しておくというように、そろそろ少しずつ絞って論議したらどうかなと思うのですがどうでしょうか。

(丸山委員)

ちょっと今の話とは別で、さっきの規模の問題で、ほかの先生と私はちょっと意見が違うみたいな感じなのだけど、これはこういうことだと思うのです。例えば教員定数というのは法律上決まっていて、こういうふうに配置されるわけですね。

それが決まっている考え方でいくと、それは一定の教員の中で、例えばクラスが5クラス、6クラスあって、習熟度で分かりやすくクラス分けすると、そのとき数を増やしてコマを幾つかつくって授業をやるとなると教員数も必要ですね。そうすると、持ち時間が増えたり、負担が増えてくるというのはそのとおりです。

だから一定の規模がなければ、それはなかなか難しいということは分かるのです。我々も体験上から、6学級ぐらいだと一番効率よく授業ができるということなど確かに体験上そうなのです。

しかし私が思うに長野県の場合は、これも体験上ですが6学級というのは大きいほうと

いう考えが、どうしてもする。やはり6学級というのは標準ではなくて、どうしても大きいなと言う感じがします。それは長野県の地形の問題もあるし、交通その他の問題もあるし、そういう点では、その辺がひとつと、もうひとつは、だからこそ教員が一定の人数の教員の中でやっていくと苦しくなるという、そういうだから一定の規模というのが必要なのだけれども、だからこそ学級のサイズを、30人学級と35人学級ということをきちんとさせていくということが、すごく今大事になっているわけで、そうするとそれを基にしてやれば教員数も増えるわけです。

そういう点でいくと、確かに学校規模の問題というのは、「財政はこれしかないよ」と「決まりはこうだよ」と言われれば、どうしようもないわけです。でも、そういう問題でいいのかなと、どうしても思うわけです。だから全部小さくすると、私は言っていない。

残念ながら今、高校には学校格差があるわけです。その学校格差の一番の中心は何かと云ったら、いわゆる生徒の格付けといえは学力なのです。あるいは問題をいろいろ抱えていて、なかなかうまく学校生活や生活がきちんとしていないとか、基本的な生活習慣を身に付いていないとかという、いろいろな問題を学校が抱えているのだし、そういう格差もあります。確かにそのほかの格差もありますが、要するに今、高校は、すごい進学校から、困難を抱えた子たちが集まる学校となっているわけです。

そのときに、確かに不登校の子はそういう学校にばかり集中するわけではなくて、進学校にも不登校の子はいるわけですが、そういう問題を抱えた子が多く集まる学校については、学校格差がある以上は、それが集まる学校はどこかにあります。そうすると、その学校は規模は6なんて大き過ぎる、もうちょっと小さくする。そういうことも含めて、単に地域校で、その村や町に学校がなければ困るというので2学級という形があるんです。

それ以外にも、少数だろうけど、都市部でもそういうことを抱えていく学校は、丁寧な教育を行う必要があり、一定の規模というのはどのくらいかという問題はありますが、私は6というのは大きいなと、そういうことです。

私は幾つかの学校を知っていますが、そういう不登校や問題を抱えた子たちが立ち直って、いきいきと学校生活にも戻ってくるというか、そういう力を付けて来るというふうになったのは、「やっぱり小さいからよかったよね」という。4学級とか、そのくらいの学校だったからよかったよねというのが、これも体験上あるのです。そういうことが、やはり議論をしてもらいたいのです。

そういう点でいくと、そういう学校はどういうところに配置していくのかという問題もあると思います。

(小山(壽)委員)

学級規模が4がいい、6が駄目というのが、ここは非常に分かりにくいのです。

今、全国で再編整備の計画が進んでいますが、大体全国の基準を見ると、3学級下限で8学級上限と。あえて標準学級数として挙げるとすると、6学級なのです。6というのは非常にいい数字なのです。習熟度をやるためにも、都合がいい。

例えば3学級を4学級に分けるということが出来る。2学級を3学級に分けることも出来る。そういう意味で、6というのは経験的にいい数字なのです。だから再編整備の前後の計画の中で、標準学級数とすると6という数字が多いです。それで学級規模というふう

にいうと、3 学級から 8 学級まで。3 学級というのは最低限。ただ、長野県の場合は 2 学級まで認めましょうということで、これはもうあえて 2 学級は駄目だよという理由はない事情の中でやっていかなくてはならない。

（中村委員長）

先ほど、宮本委員のほうから多部制・単位制の魅力、総合学科の魅力を考えることは、本当は必要ないのではないか。デメリットを考えることに議論を絞ったらというようなことでしたが、今、多分そこへ行こうとしているというふうに考えていますので。

（宮本委員）

せっかく前回、多部制・単位制もやったし、総合学科も具体的にもう少しずつ入ってきたところなので。

（中村委員長）

そのときに、多部制・単位制をどこか一局に集中せずに分散したらどうかというような議論が始まっていたので、そのため人数についての話になっているというふうに私は考えていますので、このまま少し話を進めたいと思います。

（牧 委員）

いろいろ、企業と学校は違う、それは重々承知していますが、教育はさっき言ったようにお金では買えないし、それは地域、地域に学校があればいいわけであって、今日抱えている状況の中で、よりいい部分で魅力ある学校をつくるにはどうしたらいいかということですね。

かつてあったからすべて残すということに対しては、やはり限度があると思うのです。寺子屋であったら、ずっとその寺子屋をやっているか、そうではなくて、時代、時代の流れの中で、高等学校の教育のシステムをみんな変えてきているわけです。後の大学だって変わってきています。

社会の情勢、経済の情勢、企業の環境、国際化の状況、すべて踏まえて新しい学部が出たり、新しい時代に向けての人材の育成を、今、しているわけですから、ですからおっしゃったお話の中にも、重々承知はしています。そういう中で、やはりどうしたらいいかといえますけれども、私も地域に学校を残さなければいけないということは重々承知しています。

ただどう残すべきか、どう魅力づくるべきかということだと思います。その辺で、さっき魅力説明をおっしゃっていましたね。やっぱり、具体的に出す必要があると思います。規模とか配置だとか、その辺になってくると、かなり各論になる話が出てくるかと思います。

ですから話の進め方として、システムをどうするかということをもっと具体的に進めてほしいのです。

(中村委員長)

前回、多部制・単位制のことについて少し始まりましたね。それで坂城高校の再編整備候補案に関して、もう少し距離の問題とか、生徒の就職、職業の問題とか、どうやって通学しているかということも考えて、そういうものも考えたら分散したほうがいいのではないかと。

そうなってくると、今度は学級数は減らさなければいけないことになりますね。例えば各高校に置くという、そういう話が始まったところです。今、6 学級という規模の話が出ていますので、どちらかという高校については多い規模のほうが、6 学級のほうがよろしいのではないかという意見。そう決め付けてはいけませんけど。私はそういう傾向だと思っています。だから具体的なところへ来ているというふうに思っています。

(中沢委員)

子どもが減っていくということの中で、どういうふうにやっていくのかということなのだから、例えば大規模の8とか9とかというものも暫時、それに合わせて減らしていったら、6 ぐらいまで近づけていくんだよという前提がないと、それをそのままにしておくと、地域のところでモロに少子化の影響をかぶらなければならないということを考えるわけです。

また、交通の便がいいとしても、あちこちでいろいろ問題が出てくるから、そこは将来に向けては学校も減らさざるを得ないものは減らすけれども、合わせてクラスもこのようにして6 学級をひとつの基準として持っていくという論理がそこないと、この8 学級、9 学級をそのままにしておくと大変なことになるから、そこについてはそういうひとつの柔軟性を持ったものの考え方を将来に向けて取っておいてほしいなと思います。

(中村委員長)

多分、今は都市部のところが大きな学級数を持っているわけですね。そうすると、それを減らしていくと、かなり人数がどこか別のところへ行かなければいけないということですね。

(中沢委員)

将来的に考えて、5 年、10 年の中ではそういうことも念頭に置きながら、大規模のものもやっていくというようなものも念頭に置きながら、組織編成をしていきますよという方向がないと、ベクトライズ(さまざまな出来事について、その過程や流れ、方向性を自分なりに探っていきたいと、ベクトルと「分析」をひっかけた造語)できなくなります。

(中村委員長)

当面の目標は多分6 ということだと思います。

(塚田委員)

教育委員会にお聞きしたいのですが、数を少しずつ減らしていけばいいのではないのでしょうか。

(中村委員長)

はい、事務局、お願いします。

(吉江高校教育課長)

お答えいたします。

例えば平成 18 年の入学者で、既に全県的に約 600 人減というふうにやっていきたいと思っています。そんなこともありまして、うちの考え方としますと、これはほかの推進委員会でも申し上げていますが、旧 12 通学区ごとに毎年、毎年募集定員というのは見直しております。

それで基本的には、大きな学校も含めて減をしていくという傾向で、恐らく現在大きな単位といいますが、学級数も学校も基本的に 6 学級に近づくような形で毎年、毎年の見直しの中で減っていくということになるかと思います。

それで例えば、よくこれから先あまり減らないというようなご議論もありますが、例えば私どもが平成 15 年にこの事業に手を付けたときと、平成 30、31 の前の平成 29 年あたりで見ますと、約 2,400 人減るのです。クラス数でいきますと 60 学級減るということです、非常に大きな数字であるかと思います。

今後の 30 年度、31 年度を見通さなくても、かなりの大きな数字ですので、その中で全体的な調整はしていくこともせざるを得ない、当然ながらやっていくということで考えています。それとあと、もう 1 点ですが、ほかの委員会におきましても、よく少人数規模のいわゆる今の 40 人規模を、もっと小さい規模でどうかという議論をされていらっしゃる。

それについて、私どもがおしなべてお話し申し上げておりますのは、現時点においては、まだ小学校の 4 年生までが長野県の場合は 30 人規模学級というようなことで手がついていまして、あと 5 年生、6 年生に対しては市町村のご協力をいただきながらというスタンスで、まだ中学校にまで当然入っておりません。さらに申し上げますとある程度それぞれの発達段階においての学校のそれぞれの集団の規模というのはあるかと思っていますので、40 人をベースにぜひご議論いただきたいと思います。と思っています。

その議論と、先ほど来出ておりますような習熟度とかあるいは少人数による、それぞれの講座に分かれての授業というのは、また別問題として考えていますので、そこら辺を含めてご議論いただければと思う次第でございます。

(丸山委員)

今のちょっと、そのように理解するのもいいのだけど、そういうふうに言おうとしたら、県の出してある統廃合候補案にいくと、私が試算したことで、特に旧学区によっては 8(学級) がたくさん出てきます。

県教委は、つぶず学校とか統合する学校の名前は出したけど、その計算過程は出していないので、予想して計算してみると、あれはしかも 10 数年先でしょ。その中でも 8 とかいう学級が出て来なければ、収容できないはずなのです。その辺の数字は、まず出してもらわなければいけませんね。つまりそれは、10 数年後でも 8 クラスというのが出るのではないかという心配は私はしています。それでいいのかともあります。私はどうしても 8 と

うのは大きいと感じますので。

それからもうひとつ、40 人学級、30 人学級の問題は、それはそのとおりだけど、でもそれは確かにそれをここで中心的に意見をする必要はないかもしれないけど、でもそれは、10 数年後まで 30 人学級、35 人学級はもうないと。もしこれで、ガタッと数どおり減らしてしまったら、私はもう長野県では 10 数年、20 年、その 30 人学級は実現しないと。それでいいのかという問題もあるわけです。

そういう点では、数字的には出ていないからよく分からないけれども、そういう問題があるので、ちょっと今の説明は少し疑問があります。見解を求めます。

（中村委員長）

事務局、お願いします。

（吉江高校教育課長）

また報告書の 18 ページをご覧くださいと思いますが、私どものほうの試算で動かしただころで平均が 5.5 からさらに激減期には減っていくというシナリオになっています。ですから当然ながら、ある程度の学級数を確保しつつ方向とすれば減っていくというようなことになろうかと思っています。

それと学級規模につきまして申し上げますと、もちろん私どもはそれで将来的にずっと 30 人規模学級が仮に導入されたことになったとして、ただちにそれを長野県として全く飲まないという前提では考えておりません。過去においても、例えば 45 人規模が 40 人規模になったときに、クラス数が増えたというような経過がございます。

ただ急激に、直ちにであれば激減的に今の 40 人という数が、直ちに 4 分の 3 になるのかというのは、これはまた別問題だと思えます。

またひとつのクラス数の基準でございますので、これをある程度前提においていただきませんと、あくまでも逆に今度は、例えばの話が 120 人の人数において、3 クラスなのか 4 クラスかという議論になって、全体の規模とすれば 120 人という生徒数が変わらないという面がございますので、その辺も含めてぜひご検討いただきたいと思います。

（小山（元）委員）

都市集中化というのは、このままどんどん進んでいくと思います。各地方の学校のほうはだいぶ整理されてきているような方向に入ったといいましても、やはり都市集中型、その考え方自身、この傾向は減少しないと思います。ですから今回の県教委で知らされたこの問題を、県下の各地方の方々の意見をお聞きしますと、それぞれの地域でそれぞれの地域の高校の在り方は、本来一体どうなのかと、そういう考えを真剣に考えるきっかけになったと思います。

ですから、それぞれの地域でいろいろ考えていることというのは、このまま少子化が進めば今のままでいいとは誰も考えていません。だからどういう方向で持っていったら、一番いいのだろうか。それはやはり、一番考えているところなのです。

先ほど委員長さんのほうから地域のこの代表を適するような場合は、話していただいていいというお話があったものですから、できるだけお話ししますが、私は飯山市ですが、



高社山から北のほうに4市村ございます。これを岳北地方と言っています。その岳北地方に、下高井農林高校、そして飯山照丘、飯山北、飯山南高校とあるのですが、その岳北4市村で、今の子どもの減り方を見ていると、どういう将来が一番いいかを考える会が出来上がってきたわけです。

本当にひとつ立ち上げて、みんなで考えましょう。将来像を描こうじゃないかということで、8月8日にそれぞれの団体関係等すべて入りまして、約60人の皆さんでその会を行いたいということまで進んでいるわけですから、そういう各地方でいろいろ考えていることも、大事にやはりこの会で反映させていただきながら、進めさせてもらうようにお願いしたいなとその点を申し上げたいと思います。

各地区に、きっとあると思います。

(中村委員長)

そうですね。

すべての地区にあるかどうかは、ちょっと不安ですが、できるだけそういった地域の実情を、広く反映するようにしていきたいと思っています。

(若麻績委員)

これは入り口の話だと思いますが、今回提案しています、もちろん教育委員会事務局が進めてきて、その中で学級数の問題、それから多部制、総合学科の問題が出ていますね。確か2日、3日前に会社が高校を設立したというのがありましたね。そんな話が長野県内にありますよね。それからこれからの状況をどうするのとおつづさに考えてみれば、それでは先生の信州大学もだいぶやっていたり、直したりしていますね。独立行政法人になりましたし、そういう中で、今回この中については、最終報告の中には、文字として出ないのですが、例えば県立高校を民間運営するか、そういったことにしていく魅力づくりというのが考えなかったのでしょうか。

例えば、都市部とありますけれども、8クラスもあるような大規模校になると学力だけではなく部活動などもそういう学校は強いかもしれない。強いといいますが、大規模校には生徒も集まってきますから。ただ地域校も同じだと思いますので、そういう地域校を残して、やはり残していくといいますが、そういう魅力を出すところに、例えばこの農業高校の資料5にもあるように、農業法人からの求人があったなら魅力を感じると言っているの生徒を含めて7割が就職したがっているのですね。そういった地域に根付く産と学が一緒になっていくことも重要だと思います。

いろいろな方向性として考えたらどうかということを、教育委員会を含めて検討したのでしょうか。

(中村委員長)

事務局お願いいたします。

(柳澤教育主幹)

最終報告書をお持ちでしたら、8ページをご覧ください。

高校改革プラン検討委員会の中でも、学校運営形態のありかたについて議論がございまして、その8ページの上のほうにございますが、ひとつは昨年法改正が施行されて、今年4月から導入できるようになったコミュニティ・スクール、学校運営協議会による学校運営の方法です。

それともうひとつは、そこにあります構造改革特区を活用しての公設民営型の運営形態、というようなアイデアが出されておりました、こういったことも検討材料としていただければと思います。

先ほどお話がありました上田の事例は、空いた学校を活用しての株式会社ですね。広域通信制でスタートというようなことで、紹介はされておりましたけれども、そういったことで最終報告書の中にも、そういうような形での形態について提案されております。

(森野副委員長)

地域の願いとしてやはり地域高校は残してほしいと思います。

といいますのは、本日の新聞を見ますと、下伊那は、村会議員ですか。みんな、もう村の人は必死ですよ。下伊那農業ですか、そこを先輩、あるいは後輩で村をつくっていますね。

あるいは今日も出ておりますが、中条高校、これもそうですしね。地域高校がなくなるということは、やはり村がなくなるということです。だから高校がなくなるということは、みんな都市化されてしまうということ。

そういう意味で、大変心配するわけです。それで高校の先生に聞きたいのですが、1日何時間の授業をお持ちなのか、小中の場合は丸々1日使っていますね。あるいは中学でも、1日4時間もなんて先生はいないと思いますね。クラス担任をやっている。だけど、5時間も6時間もフルに使っているわけです。ところが高校の先生はどうなのでしょう。3時間か、あるいはそれ以下ですか。

失礼な言い方だと、そうするとこれは、もし与えられた時間だけでやっているのではなく、高校の魅力づくりということになると、そういうような学校の組織づくりも必要ではないかと。ですから4学級のところを5学級に、あるいは習熟度別で、例えば40人学級を2つに分けていくというようなことを出してくるのではないかと思いますので、高校の授業時数の問題も学校の魅力づくりにつながっていくような気がしてきましたが、いかがなものでしょうか。

(小山(壽)委員)

今の、持ち時間ということですか。

(森野副委員長)

はい、持ち時間ということ。

( 小山 ( 壽 ) 委員 )

週の持ち時間は、私は中学校にも中高交流で行っていましたので、中学校のことも大体分かりますが、高校のほうが中学より持ち時間は少ないです。

( 森野副委員長 )

少ないのですか。

そうですね。

( 小山 ( 壽 ) 委員 )

ただし、教科の専門性がありますので1時間の授業をやるための準備というものは、相当な時数になってきます。大体平均すると、高等学校の場合には16時間くらいではないかと思います。

( 森野副委員長 )

16時間ね。

( 小山 ( 壽 ) 委員 )

はい。

だから、3時間ないし4時間の授業を持っている。これは学校によって、かなり異なりますので、学校によっては16時間を超えているという学校もあります。だから学校によっては16時間を割っているという学校もあります。

例えば丸山先生の話をお聞きになるといいですが、私も以前いわゆる教育困難校と呼ばれる高校におりましたので分かりますが、例えばあそこで生徒が公園でたむろしている、たばこも吸っている、あるいは食い散らかしている、すぐ飛んできてくれないかと電話が入るわけです。すぐ飛んでいきます。そんなことをやったり、あるいは放課後家庭訪問をして、今、共稼ぎのお宅が多いですから、夜10時、11時でも関係ないとかというようなこともあるわけですし、持ち時間とはまた別の形でしょうか。あるいは、進学を中心に行っている学校でいうならば、もうこの時間ならば放課後の補習が始まっておりますし、さらには土曜日にも学習室を開放したり補習を実施したりというようなことでやっておりますので、そういうトータルの中で見ていただくのがいいのかなと。

それからクラブ活動の指導も、中学のときから部活の指導は大変だと言いますが、高等学校はさらに、クラブ活動は生徒たちが熱心にやりますので、必然的にそれを指導する時間、勤務時間などは、ほぼ長時間化しているな。むしろ今は、勤務時間では、縮減すべきではないかということが、高等学校については課題になって来ている。

こういう状況であります。

( 森野副委員長 )

それはなかなか、学習のほうまでは回らないと。与えられた時間。

( 小山 ( 壽 ) 委員 )

いや、それは持ち時間は、むしろある種の学校では今、増やしていると。

( 森野副委員長 )

増やしていると。

( 中村委員長 )

はい、丸山委員。

( 丸山委員 )

今、まさしくおっしゃったとおりなのですが、もうひとつ先ほどの話で関連でいうと、コース制とか、いわゆる魅力づくり、いろいろな教科新しいものをつくったりする中で、そうするとやっぱりひとつの教科科目だけではなくて、幾つも持たなければいけないということがありますね。専門以外を含めて。

そういう点の負担がかなり多くなっていて、昔の高校、私の若いころの高校とは、今は全く違いますね。そういう点では、持ち時間は増えているし、それから先ほど小山委員さんおっしゃったように、普段、私のほうも部活をやっていますが、本当に正直いすに座る時間もないぐらい、何か生徒に問題があったりすると飛び出していきますので、そういうことはありますし、家庭訪問もそうだし、その教科以外の負担がものすごく増えているし、教科自身がやはり専門ではないのもやらざるを得なくなったり、先ほどの教員の配置の関係で、どうしても一定の定数が全部決まっていますので、例えば情報だとか、特別なもので専門の先生がいらない場合には、専門じゃないけど、情報が得意だという先生がいたらやってもらうとか、そういう形でみんなでいろいろな教科をやっていると。だからひとつの教科だけで、ずっと済んでいるという状況ではない先生が増えています。

そういう点では、昔と違って持ち時間は増えているし、今は増えています。この辺なら、確かに学校中で、それでいいわけではないけれども、教員の中で、学校の中でも相談をしながら、中の仕組みも考えていかなければいけないということはある。

異常に勤務時間は増えているし、今、本当に夜、夜中に電気がついているような学校が当たり前というように高校でもなった。朝は、7 時半ごろになればみんなかなり来ていますからね。8 時半からになっているけれども、7 時半から 8 時に来ている。というのは親も、みんな勤めがあるので、8 時前に来ていて、あるいは夜になったら 9 時過ぎに勤めが終わるというのが結構あるので、そういうことがだんだん恒常化しつつあります。

( 森野副委員長 )

ご苦労いただいていて本当に頭が下がりますが、そうすると週に 1 度といって、やたらにクラスを編成するわけにもいかないわけですね。

( 小山 ( 壽 ) 委員 )

いや、大半はやっています。

( 森野副委員長 )

やっている。

どうもありがとうございました。

( 中村委員長 )

先ほど、若麻績委員からのご意見だったのですが、最終報告の 8 ページにあるような形のコミュニティ・スクールや、保護者・地域住民が支える高校づくりというのがありますが、これは県の教育委員会から示された再編案の中には具体的にはなかったわけですが、推進委員のほうでこれを取り上げていったらいいというご意見が出れば、そういう案もあり得るというふうに解釈してよろしいですね。

( 若麻績委員 )

ただ、そのあたりで理解が深まっていないものですから、すぐ各論に入ったものですから、その中でいろいろ見ていった中で抽出されたものという意識がなかったものですから、一応その確認という意味もあったのです。

( 中村委員長 )

多分最終報告には、中間まとめの次に出てきたわけで、かなり議論された結果のメニューが示されている。それを選ぶのはやはり当事者というふうに、地域に即して考えていかなければいけないというふうに思います。

( 若麻績委員 )

それがひとつ質問ですが、皆さんの意見で財政の問題とあるのですが、これは切り離してはほとんど考えられない部分だと思うのです。先ほど言った、特区だとか、行政法人だとか、国ほうではやはり当然財政面も考えながら進めていくのだという理解をしていますが、その点いかがなのですか。

( 中村委員長 )

前回、費用がこれくらいかかると示されました。しかし、総合学科をつくるときにどのくらいかかるかの資料はありませんし、多部制もありませんので積算はできないわけですが、あまり細かくやりますと、事務局のほうの説明では、今の再編案が確定的なものになってしまうというお話ですので、細かな数値を挙げての議論というのは、この委員会ではその場で終わってしまったのですが、そういう資料が必要ですかね。財政は当然重要だとおもいますが。

( 若麻績委員 )

今ここで示すというわけではありませんが、ひとつ考えるのは国立機関の独法化ですね。例えば、信州大学さんは独立行政法人になりましたよね。

(中村委員長)

はい、ものすごく研究費が減りました。

(若麻績委員)

国のほうで変化がありましたよね。そういうことは、まだ我々の耳に入ってきませんが。

(中村委員長)

もともと工学部はお金を稼ぐ手段がありますので、企業さんとの連携で、あるいは科学研究費というものを外部資金として導入して、どんどんその割合を増やしてきました。今は研究費の85%がそちらのほうからです。ですから国から離れていこうとしています。人件費の部分は今のところどうしようもありませんけど。

(若麻績委員)

もうひとつは、同じ問題になって先生方の人事の問題だと思うのです。それも、合わせていくのはプールされている先生方で回っていくというシステムになるのでしょうか。ちょっとそれを感じました。

そうすると例えば、私立学校というのは学校法人が運営ですよね。それ以外に検討委員会の最終報告書の中ではそういう場合は、例えば県の配置の中でもできるような、そういう学校というのはできないのかなと思うのです。

(中村委員長)

元国立大学の話よりは、私立高校の話をお尋ねになったほうがよろしいと思うので、事務局、お願いします。

(吉江高校教育課長)

今、お話しいただきました、実は昨日開催されました、推進委員会でも特区の話は出ました。それで次回にこの委員会におきまして、例えば特区で現在既に行っているような学校、これは小中も含めてなのですが、どんな例があるかということをご用意したいと思っています。

それでまた特区の位置付けというのは、確かに今お話をちょうだいしましたように、国家財政絡みのお話と、それから今まで例えば株式会社ではできなかった学校運営というようなものを、株式会社に委ねることによって、よりいろいろイメージが変わった学校ができるのではないかという両面があるかと思っています。

その辺も含めて、用意できるものがあれば、またお示ししたいと思います。

またそれとは違いまして、一番分かりやすい例で申し上げますと、先ほちょっと話題が出ました、長野市立の皐月高校の場合で申し上げますと、皐月高校の人事につきましては基本的に、私どもは89校に合わせたプラス1校という位置付けで、私どものほうで長野市から委託を受けたような形で、人事を回ささせていただいています。もちろん長野市のプロパーという表現がいいのかは別としまして、長野市採用の職員もいらっしゃいますが、県の人事異動に合わせて、ある程度動かさせていただいております。

ですから、今後、当然ながら株式会社とか、そういうような形態の場合に、全く学校の運営からお金まで含めて、全部そちらのほうで持たれるような形態を取る形になるのか、あるいは今、申し上げたような長野市立さんのようなやり方をするのかというのは、選択肢としてはあろうかと思っています。

その辺は、これからできた場合の、仮の議論になろうかと思っていますので、よろしくお願いいたします。

（中村委員長）

学校のタイプも、まだまだ選択肢が候補案以外にもあるということで、議論に含めていただきたいと思います。

本日は、もう時間になりますけれども、何か特に次回に向けてありましたら、ご発言をお願いいたします。

よろしいですか。

なかなか、項目を絞ってと言いましても、関連するところが多くて、議論の進め方が難しいのでありますが、次回も今度は総合学科、多部制・単位制について、また魅力づくりということで、先ほど宮本委員からもありましたような内容に議論を移していきたいと思っています。

特にご意見がなければ、事務局から次回の予定についてお願いします。

（三澤教育支援主事）

次回の日程についてですが、先日ファックスでいただきました日程確認表と、その前にいただいておりましたものを考えまして、委員さんが多く出られるのではないかと思います。日程、8月8日月曜日と、8月25日木曜日午前あたりにと考えております。

また委員長さんともご相談の上、あらためてご案内を申し上げたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

（中村委員長）

それでは、全体をとおして何もございませんか。何かありましたら。

なければこれで第4回推進委員会を終了させていただきます。

大変お疲れさまでした。